

令和元年度 多摩市立図書館利用者懇談会

日 時： 令和元年 11 月 16 日（土）午後 5 時 15 分から 6 時 45 分まで

場 所： 唐木田図書館

出席者： （利用者） 5 名

（図書館） 図書館長、図書館本館整備担当課長、企画運営担当主査、
唐木田図書館長、唐木田図書館職員、企画運営担当職員

○ 前半 唐木田図書館の案内

10 分程度、唐木田図書館の展示コーナーやバックヤード等について職員が説明した。

○ 後半 懇談会

多摩市の図書館（概要版）を用い、図書館事業の実績を説明した。

また、日頃の図書館サービス・図書館運営について意見をいただいた。

図書館事業実績について

図書館：

多摩市の図書館の平成 30 年度の実績、活動内容について簡単に説明を行う。

各館の統計によれば、唐木田図書館の延べ床面積は 577.06 m²で、蔵書数は地域館のため約 5 万冊程度、貸出冊数は 124,952 点を数え、地域館の中では 2 番目に多い数字となっている。

登録者数については、多摩市立図書館全体で 97,284 人が登録しており、そのうち市内在住の登録者は約 80%を占め、市全体の人口に対する登録者の割合としては約 51%となる。平成 30 年度の新規での登録者は 4,762 人であった。

貸出については、多摩市全体で 1,626,112 点の貸出があり、市民一人あたり 10.9 点の利用があったこととなる。この数字は、15 万人未満の人口規模の自治体では第 3 位となる。

予約については、468,151 件あり、そのうち提供できたものは 418,837 件で、内訳として蔵書で対応したのが 403,995 件、新規購入が 3,865 件、他図書館からの借用が 10,871 件、情報提供・紹介が 106 件であった。その中で利用者からの辞退や資料の未刊行、取置期限切れにより未提供であったのが 49,314 件を数える。

参考に令和元年 10 月末現在のパスワード、メールアドレス、Felica（フェリカ）の登録者数を紹介する。パスワードは 46,117 人が登録しており、そのうちメールアドレスまで登録しているのは 23,135 人となり、メールアドレスまで登録している人はパスワード登録者全体の約半分程度である。交通系の IC カードなどである Felica を登録している利用者は 407 人を数える。

レファレンスについては相談受付件数が 77,175 件で、インターネット検索用端

末の利用者数が 3,197 件であった。

障害者サービスは多摩市立図書館が力を入れているサービスの一つだが、所蔵資料として、カセットテープに録音したテープ図書が 1,789 点、CD に音声のみをデジタル録音したデージー図書が 319 点、識字障害のある子どもの利用にも適した CD に音声とテキストなどの画像のデータを記録したマルチメディアデージー図書が 379 点、点字で表記をした展示図書が 383 点、市販の絵本に点字シールを添付した点字付資料が 318 点を数える。来館が困難な方への資料の宅配サービスも行っており、68 回の利用があった。対面で視覚による読書が困難な人への音訳を行う対面朗読については、268 回 493 時間の利用があった。国立国会図書館視覚障害者等用データベースとは、国会図書館へ多摩市で作成したデージー図書のデータを登録し、会員や障がい者サービスを行っている図書館が利用できるようになっているサービスのことで、デージー図書が提供数 138 件・利用数 1,752 件、デージー雑誌が提供数 56 件・利用数 497 件、点字図書が提供数 47 件・利用数 1,185 件であった。

団体貸出は、個人ではなく児童館や学校、学童クラブなどの団体に 3 カ月～1 年の期間でまとまった量を貸出するサービスで、登録団体数は 122 団体、貸出冊数は 26,366 冊であった。

子どもへのサービスについては、各館で様々なお話会を行っているが、総数で 412 回実施し、参加人数は延べ 4,165 人であった。また、3 カ月健診の時に図書館職員が健康センターに出向いて行っている絵本かたりかけ事業は、月 2 回の年 24 回実施しており、配布数は 899 人で対象者の 98% に配布ができています。さらに、学校向け事業として、一日図書館員や中学生の職場体験、図書館訪問を実施し、子どもへの図書館の周知を行っている。

イベント・講座については、大妻女子大学の図書館サークル O L I V E と共催で本を紹介し合う書評合戦ビブリオバトルを、永山図書館の軽読書コーナーで実施し 36 人の参加があり、豊ヶ丘図書館が福祉館の昼食会で大活字本や朗読 CD などを紹介した大人のためのお話会は 13 人の参加があった。また、パルテノン多摩との連携事業として、多摩市立図書館で所蔵している調布玉川惣画図を知ってもらうため講演会と展示を実施し、講演会には 31 人の参加があった。点訳・音訳関係では養成講座を実施している。読み聞かせについて、唐木田図書館で子育て講座「絵本の森」として、児童館との共催で保護者向けの絵本の読み聞かせ方法のレクチャーを行っている。また、図書館では学校や保育園等で活動する保護者向けの読み聞かせの初心者講座を行っている。その他、子どもと楽しむわらべ歌の講座についても 2 回実施した。

各課連携企画展示は、市役所の各課と連携して地域の課題等について広く市民に周知するために実施しているもので 18 課 24 テーマを各館で分担し実施した。

利用者：

各課連携企画展示の内容は図書館側で考えるのか。それとも図書館と各館が一

緒に考えるのか。

図書館： 一緒に考えている。各課が設定したテーマの意図や展示に関する要望を聞き取り、その内容を基に展示する資料の収集を行っている。各課で行う講座の講師の著書や各課が薦める資料で、図書館に所蔵のないものについてはできる限り購入に努めている。

利用者： 各課連携企画展示は、各課の方からこういう事業がやりたいや図書館で展示をして欲しいといった要望を出してくるのに対し、図書館が協力するというやり方なのか。それとも、図書館側から各課へ連携をもちかけるやり方なのか。

図書館： 図書館として各課と連携をしたいということで庁内に募集を行い、応じた課と連携を実施している。各課に簡単な企画書を提出してもらい、それを基に打ち合わせを重ね展示を行っている。市職員にも図書館を知ってもらいたいという意図もある。

利用者： 各課への募集は年に1回行っているのか。

図書館： 年に1回、12月下旬ごろに行っている。図書館や各課の年間計画もあるため、この時期に募集を行い、来年度に向けての準備をしっかりと行っていくためである。

利用者： 予約に関して未提供49,314件の理由の1つとして未刊行が挙げられているが、コンピュータ上で予約として処理されているということは、資料の紛失ということなのか。

図書館： まだ発売されていない未刊行資料のためお断りしたもので、予約にまで至っていないが数としてはカウントしているものである。WebOPACからの申込については、リクエストとして一端受け付けた形となり、調べた結果未刊行の場合についてお断りとしているためである。

利用者： 障害者サービスについて、多摩市で作成したデータを国立国会図書館に提供し、それが結構利用されているということだが、他市が作ったデータを多摩市が利用した場合の数字についてはデータベース利用状況の中には含まれていないのか。

図書館： 他市のデータを利用する場合については借用という形になるため、予約の中で説明した他図書館からの借用の中に含まれており、内訳としては借用10,871件のうち2,337件が障がい者向けとなる。デイジー図書は作成に手間がかかるため資料数が少なく、他図書館が作成したデータがあるなら借用して提供した方が早いため、どうしても借用の数の方が多くなってしまう。

利用者： 年間の新刊資料の総数と購入費用について教えて欲しい。

図書館： 平成30年度決算における資料費は図書が23,998点購入し45,056,839円、CD等が123点購入し443,097円、合わせて24121点購入し45,499,936円となる。

利用者： それは増えているのか。減っているのか。例年通りなのか。

図書館： 平成29年度と予算は同額であるため、ほぼ同じ金額である。

利用者： 障害者サービスの対面朗読は、唐木田図書館で行っているのか。

- 図書館： 昨年度に唐木田図書館で実施した実績はない。一番多く実施しているのが永山図書館で、他には聖ヶ丘図書館や本館でも実施している。
- 利用者： 希望があれば唐木田図書館でも実施してもらえるのか。
- 図書館： 可能である。
- 利用者： デイジー図書などを館内で利用することはできるのか。
- 図書館： その場合は対面朗読室を利用させていただくこととなると思うが、大部分の人が専用の機器を自宅に持っているため、自宅での利用をしている。
- 利用者： デイジー図書というのはどのようなコンテンツなのか。
- 図書館： 市販されている普通のCDとは異なり、本と同様に章立てされており、専用の機器を用いることで本と同様の利用ができるようになっている。
- 利用者： 専用の機器があるとのことだが、デイジー図書と一緒に貸出を行っているのか。
- 図書館： ほとんどの方は専用の機器を自分で持っている。持っていない方については、お試しということで図書館が持っている機材を貸し出すこともある。マルチメディアデイジーについてはパソコンで視聴することができる。
- 利用者： マルチメディアデイジーは識字障害のある子どもの利用にも良いとあったが。
- 図書館： マルチメディアデイジーについては、字を追いやすいように反転機能などがあり、音声も出ることから、識字障害のある子どもの読書の助けになるものであり、もっと学校教育でも取り入れていきたいと思っている。
- 利用者： CD（デイジー図書）は専用の機器で再生とあったが、パソコン上で聞くためのソフトウェアは簡単に作れるのではないか。そのようなソフトウェアはないのか。
- 図書館： 専用のソフトはあるが、一般の方用ではなく、視覚障害のある方向けに無料で配布されているものがある。また、スマートフォンで動くアプリもあるので、希望があればデータを提供し、スマートフォンで利用してもらうことも可能である。
- 利用者： 実際、学校でiPadの利用をしているが、先生からの要望があり、対象の子ども向けに提供している実績がある。
- 利用者： Felicaの利用の話があったが、図書館のカードと併用というイメージで良いか。
- 図書館： 図書館の第二のカードとしての利用であり、Felica単独での利用はできない。あくまで利用者カードを作成した方が、そのカードの代わりに使えるものとしてFelicaを登録できる。
- 利用者： 障害が多様化していく中で、図書館も様々なサービスを展開していると思うが、いまいち周知しきれていないのではないか。図書館では周知のためにどのような取組をしているのか。
- 図書館： 学校への取組として、教育委員会の方で行っている特別支援教育の推進計画を更新するための勉強会をやっているが、その時に図書館職員が障害者用の資料を

持って出向き、参加者（障がい者もいる）に資料の紹介や図書館で利用できることを案内している。ほかには特別支援学校に読み聞かせに行っているのも、その際に資料を一通り持って行き紹介をしている。さらに、学校へ一通りの資料をまとめて貸出すセット貸出なども始めている。先生方に資料の存在を知ってもらい、そこから子どもへ広がり、図書館に来館し登録してもらって利用につながるような流れを想定している。

一般の方に向けては、豊ヶ丘福祉館で行っている昼食会の場で大活字本などの資料を紹介し、それらの利用につなげていけるようにしている。

やはり、資料に対する認知が広がり必要な方に利用されなければ意味がないので、これら以外にもアイデアがあれば教えていただいて、より周知されるようにはしていきたい。

デージー図書的一般利用について

利用者： 障がい者サービスではあると思うが、デージー図書やマルチメディアデージー図書を一般の人でも利用できるとうい。

図書館： 図書館では、新潮社などが作成している朗読CDなどを積極的に購入し提供を行っている。デージー図書については著作権法の第31条の中で、視覚障害などで活字を読むことが難しい人のみへの提供を条件に著作権者の許諾を得ずに作成することが許されている。そのため一般の方へ提供することはできない

新本館について

利用者： 冒頭のあいさつの中で調べものなどで、新本館に市全体から人が来るようにという話があったが感覚的に理解ができない。調べもので使う場合も、日常的に近くの図書館を使うのではないか。多摩市は各地域に図書館があり予約本などを身近に受け取れるのがすごく良いと思っている。

図書館： 確かに場所によっては遠い方もいると思っている。新本館は中央図書館として中央公園に建てるものであり資料を集積させる必要がある。さらに、ネットワーク的な意味で全館を支援していく必要もある。自宅近くの地域館でも中央図書館のメリットを感じられるようにしていきたい。

利用者： 中央図書館となりましたというのに違和感がある。それを前提のように言われると違うのではないかと思ってしまう。

図書館： 今は拠点館と地域館がある形だが、新本館ができると中央図書館があり拠点館があり地域館がある形となる。中央図書館ができて地域館がなくなるわけではない。地域館の蔵書の動きを見てみると、調べものの利用もあるが、旅行書や生活に関する図書、小説がよく利用されている。図書館の規模により利用の実態が

異なるので、図書館のヴァリエーションを増やし、日常使いには地域館を利用してもらい、調べものには中央図書館が良ければ来てもらうというイメージである。

利用者： やはり、調べものために中央図書館へ行くというのは理解ができない。多摩市は各地域にそれなりの規模の図書館があり、その館にない本についても取寄せて利用することができる。参考図書のような貸出できない本が中央図書館に集中するのが仕方ないとしても、必要な図書を取寄せて、近場の図書館で調べものをするのではないかというのが自分の意見である。

図書館広報について

a) 広報のやり方について

利用者： 話を聞いてみて図書館も色々やっているということが分かったが、いまいち周知できていないのではないかな。

図書館： 図書館も独自のホームページを持っているので、そこでイベント情報を載せたりしているが、あまり知られていないのが現状である。

利用者： ホームページを見る人はいないのではないかな。周知するには能動的にやらないとだめだと思う。

図書館： ホームページのアクセス数は多いが本の予約を行うためだろう。

利用者： 予約でホームページを見るタイミングに合わせて露出するなど考えないといけな。予約はホームページでしているが、イベントに関する情報を見かけない。

図書館： イベントに関する情報は図書館ホームページ、市広報、たまに市ツイッターで発信している。

利用者： ツイッター、インスタグラム、フェイスブック、みんなやれば良い。

図書館： インスタグラムやフェイスブックについてはない。

利用者： 何故、ないのか。市でなくても市民で良いから、キーメンバーを決めてやるのが良いのでは。それで情報を広げる。フェイスブックは多摩市でこの間の選挙で使い 2 週間で情報を 3,000 人に配ることができた。これはネットを使った手段だが、カウンターがあるのだから、カウンターで利用者へ一声かけるなども良い。上手に情報を露出した方が良い。

図書館： ポスターやチラシを作成し、館内で掲示・配布をしているが、なかなか目に留まらないのかもしれない。

利用者： 露出のさせ方は色々な工夫があると思う。

- 図書館： 市民参画でボランティアの方に子どもの読書活動支援で読み聞かせなどをやっ
てもらっているが、いずれは地域資料の資料や、色々な知識を持っている方と資
料の整理などをやっていきたいと思っている。そこに広報というの含まれてい
る。イベント企画や広報についても市民の方々と一緒になってやっていければ、
今お話しいただいたことを実現できるのではと思っている。
- 利用者： 市民のキーマンになるような人を据えて、そうした人たちと一緒にやれ
ば良い。
- 利用者： 岐阜県のメディアコスモスや安城市の図書館のホームページを見ると、市民が
地域の活動として色々なイベントを仕掛けていっている。図書館や本好きな人た
ちによる、図書館でこんなイベントをやっているというフェイスブックなどが出
てくるようになってきている。自分はまだそこから上手く情報がとれないが、そうい
った手段が浸透し、使いこなす人が増えてくれば十分有効な手段となりうると思
う。
図書館自身が情報を発信していくことも重要であるし、市民の人が情報を発信
することも重要。
- 利用者： フェイスブックも受動的な手段であり、常に発信し続けないと利用者へは届か
ない。
- 利用者： 今の話は、図書館がここにあり、面白い本がたくさんあり、色々なイベントをや
っているということが、利用者に確実に伝われば良い話という認識でよいか。
- 利用者： それも重要だが、メディアには、目立つこと、賑わいを作る方向、そういったこ
とは取り上げられ、ニュースになったりしている。それは裾野を広げるためには
重要でやった方が良くと思うが、利用者というのはすごく多様であり、1人1人
が図書館に求めるものも多様である。そうした方法で情報を得て図書館の利用に
結びつく人もいれば、今までの図書館の基本的なサービスである貸出で会う人
たちもいる。その人たちをなおざりにしてはいけないので、図書館の基本の部分、
1冊の本に人がどう出逢っていくかというところを大事にしてもらいたい。
- 利用者： 例えば多摩市でも行っているビブリオバトルなんかよいのでは。どんどんやっ
た方が良い。
- 利用者： ビブリオバトルは、本に近づく方法としてとても良いと思う。

図書館： まず、基本として考えているのは、蔵書構成をしっかりとやっていくこと、レファレンスをしっかりとやっていくこと、本の貸出提供をしっかりとやること、他の図書館と見比べてみてもたくさん行っている企画展示で利用者に本を手にとってもらうことなどである。いずれボランティアと色々なことをやっていきたいと考えているが、それは次の段階の話である。今は新本館を作るにあたって、資料構築をしっかりとやることを第一と考えて作業を進めている。あとは職員の運営体制というものもしっかり考えていかないといけない。これらは図書館内部の話であり、今現在これらを誠心誠意進めているところである。その次の段階として市民の方々と企画や地域資料の整理、広報を協力して行っていきたい。

利用者： 市民との協力は次と言わずにすぐやればよいのでは。

図書館： すぐに実行するのは体制的に難しい。

利用者： リソースが足りないということか。

図書館： そうだ。

利用者： そのリソースの足りない部分を市民が補えるのではないか。

利用者： やりたい人がいるのをどうにか活かせればよい。

b) やまばと通信について

利用者： やまばと通信がずいぶん前に小さい版になり、その時に費用がないという説明も受けているが、これでは広報とは言えずお粗末すぎるのではないだろうか。お知らせが中心であり、こんな楽しい本がある、このような本が図書館にあるといった情報についてほとんど紙面がとれず、刊行頻度も少ないのが残念である。もっと本の表紙などが紙面に載り、サイズも最低限B4にした方がよい。今のやまばと通信では中身を読みたいという気にならない。

図書館： 現在、やまばと通信について見直しを進めているところである。ただ、やまばと通信も図書館に来た人に配るものであり、ホームページでの公開も行っているが対象が限定される。やまばと通信については現在はこのような形であるが、他市では本の紹介については広報誌とは別に出している事例もある。市によってさまざまなパターンがあり、A4で数ページの広報を出しているところもある。他市の事例なども参考にしながら、広報についてどうしていくかは考えているところである。

利用者： 少なからず、本につながり、手にとってみたいと思え、図書館に行きたいという気持ちになる広報にしてもらえると良い。

利用者： タウンニュースの図書館員のオススメ本は読み応えがあり良い。図書館の職員の話も分かり嬉しくなる。

c) 広報のタイミングについて

利用者： 自分はやまばと通信が好きで毎号読んでいます。利用者懇談会やビブリオバトルのようなイベントについて、たま広報より先にやまばと通信に掲載されている。しかし、ホームページへの掲載はたま広報へ掲載されて以降であった。なぜ、た

ま広報への掲載を待ってホームページへアップするのか。情報は出た時点で即座に掲載をすれば良いのではないだろうか。

図書館： 申込みなどがあると合わせている。

利用者： 申込みについては募集期間もあると思うが、その期間が決まったらたま広報を待たずにホームページ等図書館の広報媒体に掲載すれば良いのでは。

図書館： タイミングの問題もあるのかもしれない。あとは、内容が決まっていなくても、やまばと通信については先に載せている時もある。

利用者： 広報について、先ほど市は苦手とするところであるという話があったが、そういうベクトルの話ではなく、市が責任をもってやらなければならないものである。やりたいという人が出てきた時に、それを活かしてくれるという感覚でやってもらいたいし、もし出てこなかったら育てていく努力をするとともに、市自体が責任を持って広報に取り組みなければならない。市民が広報に参加するには責任が伴うので、そこは図書館がバックアップをし、本が好きな人同士が交流できるようにしなければならない。それは簡単なことではない。

利用者懇談会について

利用者： 懇談会に毎年出ており、要望を伝えている。都度、検討すると言っているが、結果についてのフィードバックがない。例えば、去年も一昨年もインターネットを図書館内で使えるようにしてほしいとの要望を出している。公共施設ではインターネットがフリーに利用できるようにするべきである。これに対し図書館側は検討するか書き留めると回答しているが、それがただ聞くだけなのか、それともちゃんと検討しているのか。その結果をフィードバックしてもらいたい。

図書館： 確かに結果についてはフィードバックしていかなければならない。ただし、要望によってはできないものもある。

利用者： できないものがあることは理解できる。その場合はできないと言ってもらいたい。

図書館： 結果のフィードバックについては足りていなかった。

利用者： 多様なコミュニケーションツールがあるのだから使えばよい。図書館はそういったものをきっちり作らなければならないと思っているかもしれないが、フェイスブックなどならすぐに情報発信ができる。

利用者： そういう問題ではなく、様々な要望の中には対立する要望もあると思うが、それを図書館側が受け取り検討するのではなく、市民を巻き込んでみんなで検討し、決定は審議会があるならそこですれば良いし、ないなら決定のプロセスを図書館がなければならない。例えば、インターネットを入れるにもWi-Fiは電磁波の問題などもある。そうしたこともみんなで検討したらよい。

利用者： Wi-Fiを入れることに問題があるのか。

利用者： 電磁波の問題がある。ここはパソコンが使えるのか。

図書館： 使える。

利用者： 使えるといっても Wi-Fi は飛ばしていないだろう。

図書館： ここについては飛ばしていないが、館によっては Wi-Fi を入れているところもある。

利用者： 当たり前のように批判する人がいるのかと聞く人がいる。自分もどちらかといえばそういう感覚だったが、電磁波のことを気にする人もいる。

利用者： 今時、Wi-Fi などはこちらで飛び交っている。

利用者： そういう風に言われれば、そうなのかと思うが、聞かないと分からない。

利用者： インターネットにアクセスすること自体ができないということを、先日、図書館を訪ねた際に言われたが、何か問題があるのか。

図書館： インターネットにアクセスすること自体が問題なわけではなく、図書館にあるインターネット用のパソコンは、サイトによってはフィルターで制限をかけているため見られないものがある。

利用者： サイトによってはフィルターをかけて閲覧できないようにしなければいけないコンテンツがあるよということか。それは多摩市単独でフィルターをかけたいということか。

図書館： ルールとしては、市としては必ずフィルターをかけたいと思っている。例えば、利用者が図書館に来てアダルトサイトを閲覧しても困る。そのため、基本的なフィルタリングはかけたいと思っている。Wi-Fi についても、確かに電磁波の話はあると思うが、アクセスポイントの位置を明示し、利用者で電磁波が嫌な人は避けられるようにしようと思っている。

利用者： 今は、大学病院ですら Wi-Fi はフリーで飛ばしている。何が影響あるのか。

利用者： それについては、自分も同様の感覚があったが、電磁波が嫌で病院でも困るとい人もいる。そういう人の話を聞くと、自分もどうなのだろうと思ってしまう。それは大丈夫と言われても本当なのか、そこはちゃんと調べてもらわなければならない。

利用者： 今回、Wi-Fi の危険性など細かい話をしてもしょうがないのではないか。

利用者： 自分は、細かい話をしたいわけではなく、多様な意見をどのように汲み取るのかという話をしている。

図書館： 様々な意見があるなかで、皆さまの意見を聞きつつ、図書館協議会があるので、そこで議論をしていきたい。ただし、何もかもというわけにはいかない。

利用者： 自分も協議員だが、7人の協議員が、図書館協議会は年に4～5回しかないなかで、議論を重ねていくのは限界がある。自分としては、協議会も重要であるが、利用者懇談会が重要だと思っている。しかし、年に2回、各館持ち回りでやるという方法に問題があると思っている。自分は、もっと一般の利用者がたくさん参加していると思っていたが、ほとんどいつも見かける顔ぶれであり、もっとたくさんの人の意見を聞きたかったので残念である。今回、利用者懇談会に参加していない普通の利用者の意見をどのように掘り起こしていくかが重要だと思う。そういった人たちにどうやって参加してもらうかを考えないとならない。ぜひ、多くの人の意見を吸い上げてもらえると良いと思う。

利用者： 自分は今回の参加者とは良く話をするが、図書館の職員とはじっくり話をしたことはない。自分も一般の人である。

図書館の設備について

利用者： 自分は70歳以上の人たちと色々とやっているが、そういった人たちにもパソコンを通して情報発信をしている。しかし、こうした人たちはパソコンが苦手を持っていない人も多い。だから、図書館にはパソコンを置いてもらえるとありがたい。

図書館： 中央図書館の計画の中では、貸し出し用のパソコンも検討している。

利用者： i Pad なんか良いのではないか。

図書館： i Pad も良いが、図書館の資料として所蔵しているCDやDVDを再生することが難しい。確かに、i Pad はWEB検索については非常にやりやすいし、YouTubeなども見やすい。今のところはパソコンで調整をしているが、最終的にはどちらになっても良いようには進めている。

利用者： ぜひ、早く実現してもらいたい。もう一つ、コンテンツの問題としてデータベース、特に新聞社のものにアクセスできるようにしてもらいたい。有料コンテンツを個人でたくさん契約していると大変なことになるので、図書館でぜひ提供してもらいたい。これからの図書館はそうあるべきだ。建物にお金をかけるより、コンテンツを充実させてくれる方が自分としては嬉しい。

視聴覚資料について

利用者： 視聴覚資料の品揃えが気になる。調べてみたところ、二極化しているように思う。例えば、多摩市は視聴覚資料についてはほとんどないに等しい。同様に視聴覚資料がほとんどないのは日野市、渋谷区、杉並区である。一方で、視聴覚資料を多数所蔵しているのは稲城市、文京区、品川区、新宿区などである。多数の視聴覚資料を所蔵している自治体は20人以上の予約がつく資料については複本を

購入している。多摩市も同様に図書費のうち視聴覚資料にかける割合を上げることはできるのか。中途半端が一番良くないので、どうするかを決めなければいけない。多摩市に視聴覚資料を利用する人が多数いるのかなども考えないといけない。自分としては多摩市で多数の視聴覚資料を揃えても借りられるイメージがない。そういったこともあるので、二極化している現在、揃えるか、様子見するかを決めていかないと、変な風に視聴覚資料が残ることになってしまう。

- 利用者： 視聴覚資料について近隣の図書館と共有するようなことはしないのか。
- 利用者： CDについてはリクエストできるところがなく、他自治体から借用もできない。
- 利用者： 多摩市の図書館として、何をどれくらい揃えるのか、その基本的な方針を決めようという提案だと思う。
- 図書館： 多摩市は、視聴覚資料については力を入れてきていない。CDについては朗読やクラシックの全集のような、一般の方がなかなか手に入れにくいものについては購入をしているが、いわゆるJポップのような音楽については購入を差し控えている。予算の配分もそれほど割いていない。
- 利用者： もしかしたら、もう購入できない貴重な資料はちゃんと持っているのかもしれない。
- 利用者： 図書館でCDを購入すると通常より高くなるのか。学校などで買うと高くなる。
- 図書館： 図書館では本やCDの書誌情報を購入しているが、CDの場合は本と違って少し前までは書誌を自前で作成していた。そのため、作成が追い付かないという実情もあった。最近はCDの書誌情報も買えるものがあり、今は書誌情報と一緒にCDを購入している。その分が購入費用に上乗せされ割高になっているが、職員の負担は軽減されている。

唐木田図書館の雑誌閲覧スペースについて

- 利用者： 唐木田図書館の雑誌スペースは、図書館が閉まっても雑誌を閲覧することができるのか。
- 図書館： できる。
- 利用者： それはコミュニティセンターの職員が管理するような形になるのか。
- 図書館： 図書館の管理になる。
- 利用者： 閉館していて、職員がいなくなっても閲覧できる体制でも問題なく行われているのか。
- 図書館： 全く問題なくというわけではなく、一時期、特定の雑誌については持ち去られてなくなってしまったことがある。そういった資料についてはカウンター内で保管し、利用者からの要請に基づいて開館中のみ提供するなどの対策をとった。
- 利用者： なかなか挑戦的なやり方なので、資料がなくなったりしないかなど気になった。

図書館： 聖ヶ丘図書館なども同様のやり方をしている。
聖ヶ丘などは掲示がしてあり、あまり持ち去りなどがひどい場合には雑誌閲覧スペースから館内に下げることがあると案内している。
コミュニティセンターのカウンターもあり、人の目もあるため、そこが抑止力になっている。
やはり、図書館の開館時間以外にも雑誌を利用できる方が良いだろうと思っている。

地域図書館の在り方について

利用者： 自分は東寺方図書館を利用しており、大好きだが、今、地域図書館のことをすごく心配している。中央図書館ができて向こうに資料が集積されるとなると、東寺方図書館と豊ヶ丘図書館がどうなっていくのか。建物自体のこともあるし、図書館のこともある。この問題について、市は市民に話させている。例えば、豊ヶ丘はこの間ワークショップが終わっている。その時に出てきた案を見ていると、これは図書館ではないのではないかと思う。東寺方についてはこれからワークショップを行う予定である。自分の希望としては、図書館が地域館をどのように経営していくか、方針を明確に打ち出して欲しい。そして、それを基に東寺方のワークショップで話し合いが行われれば、そこで出てくる案もあまり本来の図書館とはかけ離れたものにはならないのではないだろうか。市民懇談会を主導している行政管理課も建物のプロではあるだろうが図書館のプロではない。これから公演を行う講師の先生も都市計画のプロではあるが図書館のプロではない。それらを基に市民に話をさせても、図書館のあるべき姿からはかけ離れてしまう。

図書館： 基本構想と基本計画があり、基本構想の中で拠点館と地域館という位置づけをしているのが図書館としての考え方である。ただ、豊ヶ丘や東寺方は、立ち止まってゼロからもう一度考え直そうということで、市民の側からどのような複合施設にするかというのを考えるという方針でワークショップは始まっている。

豊ヶ丘については、中間報告で市民として臨む複合施設についての案とその課題についてもまとめられた。それを受けて、図書館や福祉館の所管がどのようにしていくかを内部で話し合いつつ、市民の方とも意見交換をするという流れになると思っている。

図書館としても、ワークショップの中間報告として出された図面そのままが良いのかということも含めて考えていくことになる。中間報告であり決まりというわけではないと思っている。

利用者： 何回も何回もワークショップをやりお金の無駄だと思う。そこにもう少し図書館の人が関われば良いのと思っている。

- 図書館： ワークショップについてはそういう場としての設定はされていない。
- 利用者： ワークショップには図書館のことが分からない人もいるから、図書館のことについて説明してくれる人がいると良かったのではないだろうか。
- 利用者： それも少しある。あまり図書館とはこうあるべきだと一方的に言うのもの良くないが、もう少し説明をしてくれる人がいると良かった。豊ヶ丘のワークショップに参加はしてないが、中間報告として挙がってきた内容は非常に問題であると思っている。
- 図書館： 中間報告はワークショップの中だけで考えていることである。
- 利用者： 自分は豊ヶ丘のワークショップに参加していたが、中間報告についてはアウトプットに関する回答がなされていない。計画を進めていく上で、市民から出た様々な意見に対し、行政としてどこまでできるのかの回答がないと、進めていくことはできない。また、ワークショップの中で東寺方との情報の共有をお願いしたが、それもできていなかった。
- 利用者： ワークショップというやり方にも問題があり、決めなければならないということで話し合いをさせられるが、最終的には市が検討をして決めてしまう。やはり、市側の意見を自分たちに投げ返してもらって、検討を進めていきたい。
- 図書館： 自分たちもそのようにしたいと思っている。
- 利用者： そうなれば良いと思っている。
- 利用者： 豊ヶ丘が最初であるため、豊ヶ丘で決まったことが今後のスタンダードになることを意識しなければならない。多様な人が集まって話していく中で、やはり図書館の基本的なことを説明してもらえると良い。
- 図書館： 図書館のことだけを考えた人だけではなく、地域をどのように活性化させるのかを考えた人や子どものことを考えた目線の人、集会場としての機能を一番に考えている人もいる。そこを寄せ集めた中での今である。
- 利用者： 図書館として地域図書館をこうしたいという思いがあるだろうが、あまりにも変な風になってしまったら残念である。
- 図書館： 変な風にならないようにはしていく。中間報告が変とも言えない。地域の人たちが考えたものである。
- 利用者： 地域の人というのは非常に曖昧である。図書館として何を大切にするのか。豊ヶ丘図書館は地域の人だけではなく、少し離れた地域からも利用者が訪れる館である。やはり、図書館に詳しく、図書館の良さを説明し伝わるような機会があれば、すごく図書館のことを大切にしている住民がしゃべることが素直に受け止められるようになる。職員が関わって、専門家に豊ヶ丘や東寺方はこういうところが大事なんだって言ってもらえるとすごく良い。
- 図書館： 何回か出席した中では一緒になって話し合いをしている。

唐木田図書館からのお知らせ

図書館： 大人の折り紙工作会が12月8日にあり、現在、参加者を募集中である。もう1件、ぬいぐるみのお泊り会についても参加者を募集中である。あとは新年に本の福袋を1月4日より実施する。